

## 「ピント外れの勉強」その四 「Xの確認をしない勉強」

「校長先生、『ピント外れの学習』その四を早くお願いします！」

待っている生徒がいるとわかり感激しました。こういう一言がエネルギーになりますね。それでは五日ぶりに書きますね。

この勉強をしている生徒がいちばん多いと思います。テストを返したときに、それがよくわかります。私も数え切れないほどテストを作ってきました。テスト返しの時に生徒の様子を見ていると、こういう勉強をしているであろう生徒がその中にいるとわかります。君はどうですか。確かめてくださいね。

「ピント外れの勉強」その四は、「**□**けて**正答を書き込む**だけで、**Xの確認をしない勉強**」です。テストだけではありません。ワークやプリントを使っただけの学習にも言えることです。

テストにしてもワークにしても、はたまたプリントにしても、**できない問題やXがついた問題があったときに、□だけ付けたり、答えを赤ペンで書き込んだりするだけでは、力はつかない**ということですよ。答えを写せば力がつくと思っていたり、「いつか見直したときに理解すればいいや」と先送りしたりするのは、**わかったつもりになっているに過ぎない**ということですよ。

先ほどテスト返しの時のことについて書きました。どのように考えて正解を導き、どのように応えればよいかを丁寧に解説しても、それを自分のものにしてしまう思っただけで必死になっている生徒はまずいません。気にしているのは採点ミスや計算ミスばかり。解説が終わって質問を受け付けても、列を作る生徒は点数を増やすことばかりに気がついていて生徒たちが多いですよ。そんな中、数は少ないですが、質問に來たり再度の解説を求めたりする生徒が過去にいました。印象深いのは、作文の問題の自分の解答を添削してほしいとやってきた生徒です。点数は決して低くなかったのですが、**その生徒のこだわりは点数ではなく、よりレベルの高い文章を書くこと**だったようです。私は喜んで彼の文章を添削しました。

「Xの確認をしない勉強は、例えるなら「打ち上げ花火」です。打ち上がるまでは心待ちにし、打ち上がったなら「きれいなあ」で終わってしまう花火。「Xの確認をしない勉強」も同じです。受けるまでがんばるぞとやる気に満ち、テストが帰ってくるまではわくわくドキドキ。返ってくると、「(点数が)よかった、悪かった」で終わってしまいます。残るのは、花火の残骸だけ。力は到底つきません。

「そうであれば、Xの確認をすればよい」と思いがちですが、そこが「**ピント外れの学習**」その五になります。**確認の仕方が問題**なのです。模範解答を写すだけでは確認になりません。

「**確認**」とは**どうすればよいのか**。いよいよ、筆者国立氏の主張する勉強の核心に迫りますよ。

(三月九日 記)